

忘れ得ぬ思い出

相良 好正
Sagara Yoshimasa



「東京 2020 オリンピック」がコロナの影響で一年延期され、今年2021年に開催されました。開催にも、賛否ありましたが、アスリート達にとって開催されたことに感謝している選手も多い事だったと思います。

オリンピックで思い出した言葉に「夢を追いかける者だけに未来がある」があります。2000年シドニーオリンピックである選手が現役復帰し、金メダルを獲得しました。この言葉を信じ、何度も唱え、厳しい練習に励み、夢をかなえたそうです。

この言葉は、ルーズベルト元大統領の名言として、当時社長だった現名村会長が、「人は夢がないと老けると言われます、常に夢をもって、それに向かって挑戦しよう」と20年前に紹介されたことを思い出しました。

また、ONASSIS GROUP発注の五輪のマークを付けたスエズマックスタンカー船「OLYMPIC FLAG」「OLYMPIC FUTURE」を苦勞して建造したことも思い出として浮かび上がってきました。

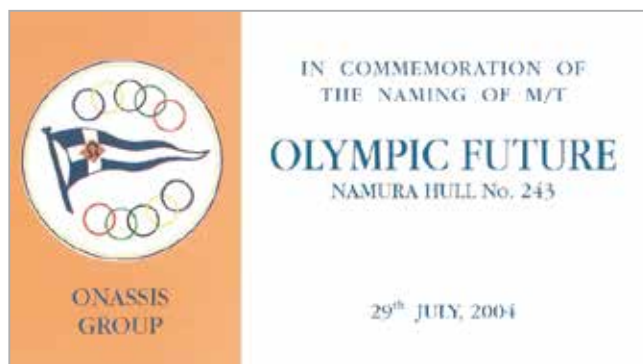


写真1 ポストカード



写真2 海上試運転に乗船

1974年(昭和49年)名村造船所に入社し、2019年(令和元年)函館どつくを退職しました。45年間にわたり、造船一筋に務め、その間造船不況にも遭い、仲間たちが去っていきました。

当時の合言葉で「去るも地獄、残るも地獄」が今も鮮明に残っています。決して同じことを繰り返さないためにも、「自分たちの会社は自分たちで守るんだ」と強い信念をもってやってきた記憶が今も残っています。

入社以来、色々な経験をさせていただきました、伊万里工場建設に携わることもでき、自衛隊体験入隊・D2P研

修も経験し、生産性向上・コスト削減のために、現場サブリーダー以上がグループに分かれ黒川寮、福島国民宿舎等で夜遅くまで、ミーティングを行い具体的な行動案を作成し、発表とともに、翌日から実行、目標達成に向けて突き進んだこともありました。

全社目標管理運動として、1983年（昭和58年）より「20作戦」サンプリング、「全社IE運動」から始まり、毎年、「ID（伊万里ダントツ）作戦」・「IC（伊万里チャレンジ）作戦」・「IB（伊万里バトル）作戦」・「IA（伊万里アタック）作戦」・「5D（DASH・DANTOTSU・DRILL・DEEP・DEVELOP）作戦」・「チャレンジ20作戦」・「ACT（アタック コスト ターゲット）作戦」・「IS（伊万里サバイバル）作戦」・「CS（コストとサービス）作戦」・「CDIC作戦」・「KS30」工場改善運動と作戦名を掲げ、作業改善・業務改善等コスト削減と品質向上、顧客満足に取り組みました。

新規大型設備設置についても、1999年（平成11年）「二重化生産ライン新設、大組工場DE間延長」2001年（平成13年）「ロング先付製造ライン」を現場責任者として発案・計画・設置まで参画し、コスト削減に取り組みました。

建造船関連については、名村造船所では、自動車専用船、セメント船、コンテナ船、タンカー、大型バルクキャリアー鉱石石炭運搬船、砂利運搬船、OBO（Ore Bulk Oil）船、アルミ製漁業取締船、大型メタノール船、LPG船、大型鉱石運搬船建造等、函館どつくでは、沖合底引き網漁船から、漁業試験調査船、石油備蓄援助船、タグボート、セメント船、フェリー、34BC、38BC、とあらゆる船型建造に従事することができました。

函館どつくでは、新造船建造だけではなく、修繕船にも携わることができ、特に東日本大震災による被災、損傷した巡視船「くりこま」復旧工事に責任者として対応し無事完工、完工出港時に、NHKからのTVインタビューを受けている状況が全国ニュースで流れました。

また、短期間にて工事完成させ、現場復帰させることができたため、異例ですが、第二管区海上保安本部長表彰も頂きました。

また、ロシアで運行されている砕氷船も定期的に修理業務に携わることができ、特殊操舵装置の取換え、砕氷船としての外板特殊塗装等にも関与することができました。



写真3 巡視船「くりこま」座礁の状況



写真4 巡視船「くりこま」完工出港の光景



写真5 感謝状授与の光景

海外への調査、技術指導にも携わることもできました。

中国・韓国・シンガポールの造船所・工場へ、調査・補償工事・外注品製作・品質検査等で行く機会がありました。

1984年（昭和59年）に、労働組合の代表として、中国を訪問する機会を得、当時日中国交正常化後でもあり、大半の人が、緑色の制服（人民服）を着用し、組織として人民公社がありました。北京・上海を訪問し、北京では有名な人民大会堂にて歓迎晩さん会があり、入ることができました。



写真6 人民大会堂での歓迎会の招待状



写真7 人民大会堂2階ホールにて

2002年（平成14年）以降中国を訪問する機会が多々あり、造船所が多数建設されており、従業員の多い事と男女平等に作業しており、外業のジブクレーンの運転手やCO₂溶接職にも多数女性が多かったことには、当時驚かされました。

韓国の大手造船所では、大型ドックで大型船4隻同時建造しており、ブロックも大型ブロック建造方式で、工期短縮に努めており、敷地が広いため、バス停があり、バスでの移動、検査官、監督は乗用車またはバイクでの移動でした。設備・品質・船主対応等については、日本は負けていると感じました。

タイへの造船進出、ユニタイシップヤード アンド エンジニアリング株式会社（UTSE）設立の際に、当時の河崎所長より事前調査の指示があり、レムチャバン港の一角の進出予定地に当時営業の田中淳一さんの案内で行きました。バンコクから車で一時間半程度の離れた所に位置し、砂浜が続く海水浴場のリゾート地の一角で、護岸工事は、終了していましたが、敷地内は地盤が悪く水没した状態で、イギリスから購入した中古のクレーンがコンテナの中に保管され、警備員が機関銃をもって警備しており、暑さと湿度が高くコンテナの中のクレーンには、湿気で水滴が付着しており、換気をするよう話をしました。

帰りに田中さんから次回は、勤務で来てくださいと誘いがありました。



写真8 UTSEの全景（現在）

また、船主として深いつながりがあるインドの大手総合重工（以後、X社という）のグループ造船所（以後、Y社という）へ技術指導にいきました。商社（以後、Z社という）の会長とX社の社長が伊万里工場見学に来社され小生が案内した際に、Z社の会長より、X社も造船所を経営しているので、Y社の社長と造船部長の見学依頼がありました。Y社社長等の工場見学も小生が案内し、特にパネル工場に感銘を受けられ、是非技術指導をお願いしたいとの話がありました。後日技術指導の話があり、事前調査と現場指導にも行きました。

世界各国の船主、監督と接する機会があり、特にギリシャ船の連続建造時代は、イースターを祝って、名村団地監督宿舍庭で羊の丸焼きをしながらワイン片手に懇親会をしたことも思い出しました。当時の監督が佐世保造船所にて建造監督としていたとの話を聞き、再会し昔話に花を咲かせました。

引き渡し時には、船員に記念として製作された帽子を頂き、ポストカードとともに大切に保管しています。

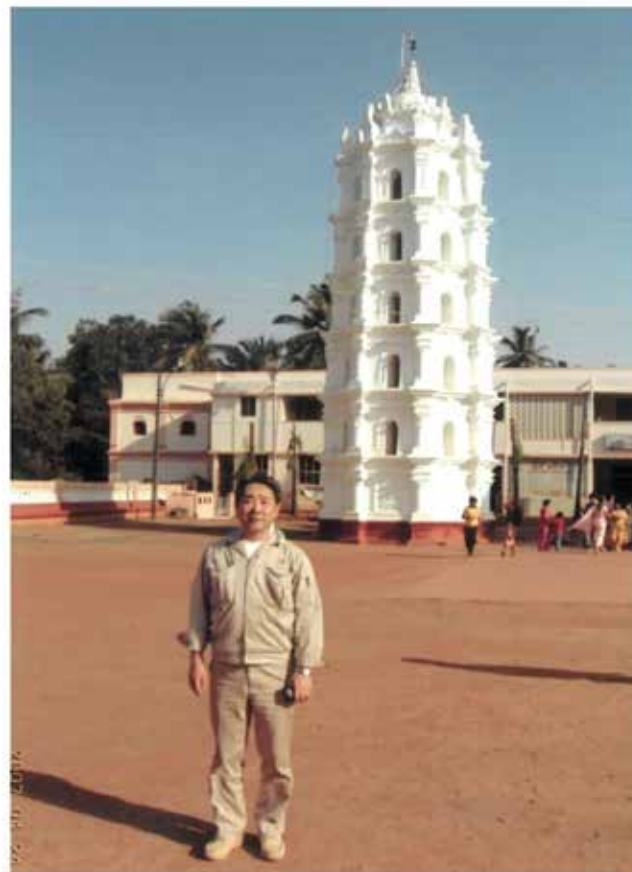


写真9 インド訪問時の寺院前にて



写真10 監督宿舍庭での懇親会の様子



写真11 竣工記念として製作された帽子

名村テクニカルレビューには、過去に下記項目を投稿させていただきました。

- 2000年（第3号） 船殻二重化工場増設による生産の効率化への取り組み
- 2001年（第4号） ロンジ先付けラインの紹介
- 2012年（第15号） 東日本大震災による被災・損傷巡視船「くりこま」復旧工事の記録
- 2014年（第17号） 旅客船兼自動車航送船「はやぶさ」の紹介

今回、「コーヒーブレイク」への執筆依頼があり、即座に承諾したものの、何を書けばよいのか迷っていましたが、45年間の勤務の中で起こった、小生の楽しく忘れられないエピソードを投稿することにしました。

(1) 1997年(平成9年) サッポロビールのCM制作に参加

4月10日・11日の2日間にわたり、サッポロビール(生)黒ラベル「夏編」のCM撮影に、当時建造係長だった小生が責任者として対応しました。

名村造船所伊万里工場を選定した理由は、日本中の造船所を調査し、「海沿いに立地していて対岸に町が見えない」「ドックに製作中の建造船があり、スケジュール的に適していた」の2点がポイントになったとの事でした。

CM出演者は、当時NHKのドラマ「大地の子」、最近ではテレビ朝日のドラマ「遺留捜査」等に出演されている上川隆也さん(CMの役柄は設計技師)とVシネマ・舞台を中心に活躍されていた崎山祐一さん(CMの役柄は現場のマネージャー)の二人でした。

撮影当日は好天に恵まれ、出演者・スタッフ等約40名の関係者が来社され、撮影場所も西ドック建造船横での高所作業車上と総組場での撮影で、二人には、安全ベルトの着け方を指導し、一部の現場スタッフ・作業員もCMのエキストラとして登場しました。

上川氏からはサインを頂き、後日CMのビデオテープと伊万里工場勤務者、協力会を含めて全員に缶ビール(2本)のプレゼントがありました。

CMは、5月から8月までテレビ放映され、全国に名村造船所が映りました。



写真12 撮影現場に責任者として付き添い



写真13 撮影中の様子

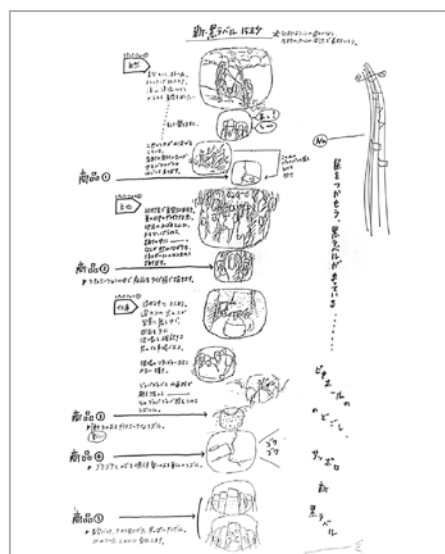


写真14 絵コンテ

(2) 1999年(平成11年) JT(日本たばこ産業株式会社)の広告写真モデルとして登場

愛煙家が肩身の狭い思いをしている今日この頃。たばこがもたらすメリットを最大限に表現し共感を得ようと「はりつめたら、ゆるめよう。」のキャッチコピーで週刊文春、週刊現代、週刊ポスト、AERA等の雑誌を媒体にJTの雑誌掲載用広告写真の撮影が、9月6日・7日の2日間にわたり、伊万里事業所で行われました。

これまで工事現場や旅行会社等を舞台とした写真を掲載してきたJTの雑誌掲載用の広告写真の「造船ドック責任者編」ということで、造船所何社かモデル選考があった中、当時建造ドックスタッフの前田正則くんとともに広告写真のモデルとして抜擢されました。

撮影当日は、朝からぐずついた天気でしたが、カメラマン・スタッフ等10名の関係者が来社され、撮影場所も船をバックに、中間ゲート上での撮影で、雲の切れ間から太陽が顔を出した瞬間から、本番スタート。撮影開始時は、緊張していましたが、段々と緊張もほぐれ、カメラマンの「OK」の声と、全員の「お疲れさまでした」で撮影は無事終了しました。

リハーサルも含め、200枚以上の写真が撮られ、実際に使われるのは、たった一枚のベストショット。当然喫ったたばこの本数も200本以上でした。

裏話をすると、当時禁煙を始めたばかりで、モデルを断ろうと思っており、総務部長に話をしたところ、「もし選考された時は、撮影の時だけ喫う真似をしてみるのはいかがでしょうか」と提案され、承諾した始末。

採用され広告写真が雑誌に掲載され、それを見た母から禁煙したのではないのかと、わざわざ電話で問い合わせがありました。また、引き渡し時に来社された、船主関係者の方々からも、是非会いたいと営業を通じて連絡があったこともありました。雑誌の影響力は大きいな一と感じた次第です。



写真15 社内報で紹介された記事



写真16 雑誌に掲載された広告写真

(3) 2007年(平成19年) インド造船所の技術指導と建造船横滑り進水式に出席

海外調査、技術指導で記載していますが、2007年4月に、技術指導にあたり、事前調査のためインドの造船所Y社を訪問しました。Y社はインドのゴアに位置し、2か所の事業所(以後、A事業所とB事業所という)と加工・艤装工場(鋼材ショット・NC切断・曲げ・パイプ製作)が別の場所にあり、両事業所に支給されていました。

当時の主力船型は、499総トン型貨物船で、両事業所とも、川に面しており、A事業所は、滑走船台による進水でした。訪問し赤土の上での作業でしたが、ブロック製作と総組立がおこなわれており、内業工場は、名村造船所のパネル工場と同様に、H型鋼材でブロック定盤が作られており、簡易溶接台車にて板継後、ブロック組立・溶接で各移動は搬送台車によるブロック移動でした。ハッチカバー製作工場もあり、全てが自社制作となっていました。

B事業所は、横滑り船台、艤装岸壁横で建造し、傾斜台を使用しての進水でした。

技術指導については、CO₂溶接を実施されていますが、裏当材があるにも関わらず、裏はつり(ガウジング)が主流であり、またブロック搭載後の取付も、ブロック継ぎ手に、仮付溶接をしていたため、溶接・取付方法の指導をすることとなりました。

12月13日～31日まで、溶接指導として、生産技術開発部佐藤桂くん・取付指導で船殻部外業課田中元次くんと3名で訪問し、特にCO₂溶接の片面溶接と治具を付けての取付方法を指導しました。

12月24日にB事業所にて横滑り進水式があり、来賓として出席し、進水時の入魂式で、小生の紹介があり、ココ椰子(ヤシ)を船体に押し付け割るように言われ、無事役割を果たすことができました。

横滑り進水は初めての経験であり、建造船横の横滑り台船の滑走スイッチの前で、Y社の社長横での見学となり、社長がスイッチを押された瞬間、建造船は横滑りしながら川へ滑り落ち、その反動で波が地上に上がり、社長共々ずぶ濡れになり、お互いに無事進水のお祝いを交わしました。



写真17 進水前の滑り台



写真18 滑り台止めジャッキ



写真19 横滑り進水

余談ですが、昼食は、工場で幹部の方と一緒に、スプーン等使用せず、右手の指を使つての食事でした。
(左手は不浄の手のため使用しない) 食事前後は皆さんで、手を洗いに行ったものでした。

カースト制があり身分の格差を感じました。

ゴアには、日本で有名な宣教師フランシスコ・ザビエルの遺骸が安置してあるボム・ジェズ教会に休日
見学に行き、外から見えるようにガラスの棺に納められおり、キリスト教徒が多く、クリスマスには庭に、
キリスト誕生のモニュメントが飾られていました。

冬は保養地として、観光客が多くビーチには人だかりでバカンスを楽しんでいました。

機会があれば、また行きたいものです。

執筆がつまらない懐旧談になってしまいましたが、自分のやってきたことを振り返って見て、造船部・品質管理部・
営業本部業務部在籍中、また函館どつく株式会社勤務に於いても、ご指導いただいた上司、先輩、支えてくれた同僚、
部下にこの紙面をお借りして感謝する次第です。

以上、ご安全に！

執筆頂きました相良氏の株式会社名村造船所及び函館どつく株式会社における概略の経歴についてご紹介します。

1974年	4月	株式会社名村造船所入社 工作部総組課勤務
1977年	6月	検査課勤務
1981年	5月	生産管理部検査グループ勤務
1985年	5月	製造本部造船部艤装課装備係長
1985年	11月	製造本部造船部内業課組立1係長
1994年	7月	船舶海洋事業部造船部船殻課建造係長
1997年	12月	船舶海洋事業部造船部船殻課長
2001年	7月	船舶海洋事業部計画課長
2002年	4月	生産業務本部品質管理部長
2005年	10月	船舶海洋事業部営業本部業務部長
2008年	10月	函館どつく株式会社出向 室蘭製作所長付顧問
2009年	4月	室蘭製作所副所長 兼 新造船プロジェクト室長 兼 船舶部長
2010年	10月	執行役員 新造船事業本部副本部長 兼 船舶部長 兼 室蘭製作所副所長
2012年	3月	株式会社名村造船所定年退職
2012年	4月	函館どつく株式会社に移籍 執行役員 新造船事業本部副本部長 兼 中小型船事業部長 兼 製造部長 兼 室蘭製作所副所長
2017年	6月	取締役執行役員 新造船事業本部長
2019年	6月	函館どつく株式会社退職